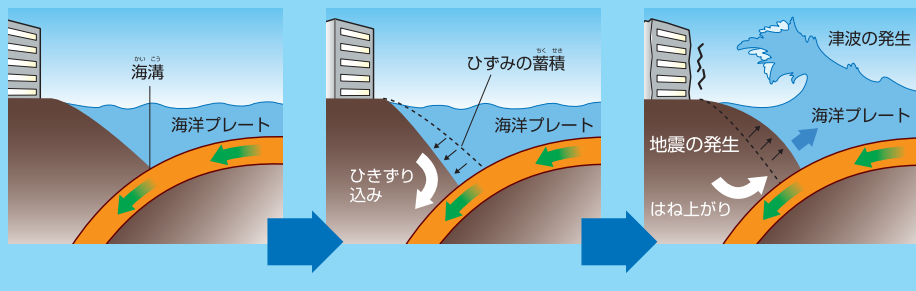


津波はどうしておこる?

津波は、多くが海底でプレート境界型地震がおきたときに海底がもち上がったたり、しずみこんだりすることでおこります。最近では、平成5年におきた「北海道南西沖地震」のとき、奥尻島に約30mという高さの津波がおそいかりました。

津波のこわいところは、スピードがものすごく速いということです。震源地が近い場合、ジェット機なみ(秒速約200m)の速さで進むこともあると言われています。したがって、津波情報が発表される前にやってくることもあります。海や川(河口部)のそばにいて地震を感じたら、ゆれが小さくても、とにかくすぐに高いところへ逃げるのが大切です。

津波のメカニズム



太平洋を1万7000km横断 千リ地震津波



毎日新聞社提供

昭和35年5月23日午前4時11分(日本時間)、南米のチリ南部沖を震源とするマグニチュード9.5の巨大地震が発生し、この津波が約1日かかりで太平洋を横断し、1万7,000kmもはなれた日本沿岸に到達、日本各地に大きな被害をあたえました。日本から遠くはなれた外国でおきた地震で、当時は地震の情報がまったく伝わらず、無警戒だったため、突然やってきた津波によって日本で139人もの死者・行方不明者を出しました。

地球の反対側から津波がきてわたしたちをおそう・・・大自然はときどき信じられないようなできごとをおこすのです。

津波からの
サバイバル

- ★地震のゆれが小さくても津波が発生することがあるので、油断ゆだんしないようにする。
- ★津波は何度もやってくる。最初の津波がすぎ去ったからといって安心はできない。
- ★珍しいからといって、見物けんぶつは危険。

読み
もの

津波てんでんこ

過去に何度も大津波を経験している東北ひがひの三陸地方には「津波てんでんこ」という言い伝えがあります。これは、「津波がきたら、親も子どもも何もかも見せて、てんでんばらばらに逃げなければ命は助からない」という意味で、明治29年に三陸地方をおそった、「明治三陸大津波」災害のときに、本当まことにあった悲しいお話からできた言い伝えです。津波は、ものすごい速さで押しよせてくるので、わき目もふらずに避難しなければならぬという、津波災害から命を守るための非常にきびしい教えです。

そんな三陸地方のまち、岩手県田老町たろうちやう（現：宮古市）は、明治三陸大津波をはじめ、過去に何度もたくさんの死者を出す大きな津波被害を受け、「津波太郎」というあまりありがたくない名前までつけられていました。しかし、またも大きな被害をもたらした「昭和三陸大津波」がおきた昭和8年をきっかけに、全長1,350m、海面からの高さ10.7mの防潮堤ぼうちやうていが町民たちの熱意により同年から昭和58年にかけて建設され、今では「田老万里の長城」とも言われています。さらに避難訓練や語り部べを通じて、親から子へ、子から孫へ津波災害の教訓きやくんは確実に語り伝えられ、いまでは「防災の町」として知られるようになっています。



田老町の津波防潮堤